月にはうさぎ、ひとりきり。

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月にはうさぎ、ひとりきり。

【Ｎコード】
Ｎ９０２０Ｎ

【作者名】
律花

【あらすじ】
「月におるうさぎは、淋しくないんかな」
天上の月から穏やかな光が降り注ぐ夜。祭りを楽しんだ、その帰り。ひと気のない公園で、幼なじみの雪乃がそう言った。

夏の終わり、月の夜

ブランコをぐるりと囲む低い柵に腰かけ、大輔は周囲に視線をめぐらせた。
アパートの横手に設けられた小さな公園。それでも、砂場、すべり台に鉄棒、二台のブランコと、最低限の遊具は揃っている。昼間なら周辺に住む子どもたちでそれなりに賑わっているここも、さすがにこの時間ともなればひと気はない。

きぃ、と鎖が軋む音がした。
大輔は前を向き、ブランコの乗り手である少女を見やる。
平均よりも幾分小柄な体躯。セミロングの黒髪と、二本の鎖を掴む白い手が月明かりに映えていた。
「ゆき」
呼びかけると、少女――雪乃は、俯けていた顔をのろのろと上げた。
「……どうしたん？」
「公園行こうって自分から言っといて、それはないやろ」
すこし怒気をはらんだ声に、雪乃は小さく肩を縮こまらせる。
「そやね。……ごめん」
素直に謝られて、大輔は感情の行き場をなくしてしまった。別にええけど、と淡白に応える。
また、なんか嫌なことでも思い出したんかな。
いまだぼんやりとしている雪乃を見て、大輔は思う。
それにしても、今日は極端や。
さっきまでの雪乃は、地元の商店街で催されたささやかな祭りに、いつになくはしゃいでいた。吊り下げられた提灯の明かり、焼きそばやたこ焼きの匂い、たらいを泳ぐ金魚、射的の音。すべてを全身

で楽しんでいるように。
なのに、遊びまわったその帰り道、先ほどまでの様子が嘘のように黙り込んでしまった。そして、
――公園、寄ろ？
二人が住むアパートの付近に来たとき、突然そう言ったのだ。

話の接ぎ穂を失って、大輔は何とはなしに空を仰いだ。
濃紺の海には穏やかな光を放つ月がたゆたい、数はそれほど多くないが、星もまたたいている。八月の終わりとは言え昼間はまだ蒸し暑さがとどまっているが、夜になればだいぶ気温が下がり、ときおり心地よい風が吹き渡る。
「月、きれいやね」
自分と同様に空を眺めているのだろう、雪乃がぽつりと呟く。
「まあ、そうやな」
束の間の沈黙。そののち、雪乃は透き通る声で言った。
「月におるうさぎは、淋しくないんかな」
それは、問うているようでも、独りごちているようでもあった。
大輔は月に目を凝らす。
月を覆っている影の形が、うさぎが餅つきをしている姿にも見えるというだけで、もちろんほんとうにうさぎがいるわけではない。そんなことは、雪乃自身もよく分かっているだろう。浮き世離れしたところがあるとは言え、そこまで極端ではない。
だから、現実的な指摘など意味を持たなくて。
「なんで」
たずねると、雪乃は空を見上げたまま答える。
「あんなとこに、ずっと一匹だけで。地球には仲間がいっぱいおるのに……しゃべることも、触れ合うこともできひん」
変なこと言い出すなあ、と大輔は内心で首を捻った。
仲間というのは、地球にいるうさぎのことだろうか。しゃべるだとか触れ合うだとか、まるで人間について語っているような物言い

だと思う。雪乃の中で、うさぎは人間と同じ感覚や精神構造を持つ生き物なのかもしれない。
無粋な思考はさておいて、とりあえず、
「一匹じゃなくて、一羽やろ」
大輔が指摘すると、雪乃は一瞬きょとんとして、それからくすくすと笑った。
「細かいなぁ、だいちゃんは」
「そうか？」
「うん」
「別に、淋しくもないやろ。のんびり餅でもついてるんちゃうか」
茶化すように言う大輔に、雪乃がいつもと変わらない、ふわふわとした笑みを浮かべる。
「もー。そういうことばっかり言う」
ごく一部の親しい人間にしか見せない表情。ちょっとは元気になったかな、と大輔はほっと胸を撫で下ろした。塞ぎ込んでいる雪乃を見るのは、好きではない。
けれど次の瞬間には、その笑みは掻き消えていた。ため息のような声が夜闇に溶ける。
「きっと淋しいんやろな」
なんで、こんなこと言い出すんやろ。
引っかかるものはあったが、聞くことがなんとなく躊われて、大輔は口を噤んだ。

雪乃は普段から精神的に不安定なところがある。さっきまで笑っていたのに、ふと目をやれば沈んだ面持ちになっていることなども、めずらしくない。
幼い頃から時間をともにしてきて、大輔はその理由を察していた。
雪乃はひどく傷つきやすい。
普通なら気にも留めないことやすぐに忘れることを、真正面から受けとめてぐずぐずと引きずってしまう。せっかく癒えかけた傷口

が、すこしのきっかけでまた開いてしまう。ひとたび失われた心の均衡を取り戻すのは、雪乃にとってひどく難しいことなのだろう。
そんな、まるで繊細な硝子細工のような脆さが、ときとして大輔には危なっかしく、またもどかしくも感じられた。
「……あたしも、ちょっと淋しい」
「なにが淋しいん？」
今度は、聞けた。
雪乃が大輔をじっと見る。その目は月明かりを映し出して、心なしか揺らいでいた。
「春になったら、だいちゃん、いなくなるし」
ああ、と大輔は声を洩らす。
そういうことかと納得がいった。そんな先のこと、気にしてたんか。
春になったら、というのは、大輔が大学に入ったらということだろう。
大輔が目指している大学は、本命も滑り止めも、自宅から通うにはつらい距離にある。だから、どこに入学することになっても、大学付近で下宿先を探すつもりでいた。なにかの話の流れで、雪乃にそれを伝えたことがある。
「まだ八月やん。そんなん、ずっと先の話やろ」
大輔の言葉に、雪乃は自嘲するような笑みを浮かべ、ゆるゆるとかぶりを振った。
「去年もそうやったもん。まだまだ先やって思ってたけど……お祭りの日から、はーちゃんがいなくなるまで、あっという間やった」
いまは東京にいる葉月の顔が脳裏に浮かぶ。雪乃は二つ年上の姉のことを、昔からそう呼んでいた。
一度くらいお姉ちゃんと呼ばれてみたいと、いつか葉月が苦笑交じりに言っていたのが記憶に残っている。
「だいちゃんがいなくなるのも、あっという間なんやろな」
「しゃあないやろ。ここから通える距離にないねんから」

語調を強めて言うと、雪乃は怯えたように目を伏せた。両手の鎖を強く握りしめる。
居心地の悪さに耐えかねて、大輔は自分の手元に視線を落とした。すこし冷たかったかもしれない。でも、事実なのだから仕方がない。
後悔と自己肯定がせめぎ合う最中、
「……けど、はーちゃんも、だいちゃんもいなくなったら、あたし、ひとりになる」
不意に雪乃の声が震えて、大輔は心が波立つのを感じた。ひとり、という単語がずしんとのしかかった。
なかなか人と打ち解けられない性格のせいか、雪乃は高校に親しい友人がほとんどいないらしい。はっきりと本人の口から聞いたわけではないが、ときどき交わす会話から漠然とそう察せた。
だから、大輔がいなくなるということは想像以上に、雪乃の心に影を落としていたのかもしれない。
「俺がここを出て行ったって、別に月と地球みたいな距離があるわけちゃうやろ」
大したことではないと言い含めるように、わざと軽い口調で応える。
「……うん」
「なんかあったら、電話でもメールでもしてくれてええし。俺も連絡とるから」
こくん、と雪乃が小さくうなずく。
そう言い聞かせておいても、雪乃はきっと、自分からは電話もメールもして来ないだろう。邪魔じゃないか、面倒に思われるんじゃないか、とそんなことばかり考えて。
これまで万事に置いて、相手に働きかけるのは決まって大輔のほうだった。今日二人で祭りへ行くことになったのも、自分の勉強の気晴らしにと大輔が話を持ちかけたからだ。だから、雪乃が公園に行こうと誘ってきた程度のことでさえ、大輔にしてみれば驚くべき

ことだった。
「でも……あたし、嫌や。昔みたいに、いられへんの」
そう言って、雪乃は気持ちを落ち着かせようとでもするように、大きく息を吸い込んだ。
「……ごめん……あたし、怖いねん。だいちゃんが遠くなりそうで、怖い」
いつになく感情的な、絞り出すような訴えが、胸に刺さった。
今年の春に葉月が東京へ行ったときも、雪乃は目に見えて落ち込んでいた。性格はまったく違えど、友人同士のように仲のよい姉妹だったから、無理もないと思っていたけれど。その上、今度は大輔までいなくなるのだから、不安で仕方なかったのだろう。最近は受験勉強に意識が傾いていたせいで、しばらく雪乃と連絡を取らずにいたから、尚のこと。
ようやくそれに気がついて、大輔は居たたまれなくなった。祭りのとき、不自然なほどに明るかった雪乃が思い返された。あれは純粋に楽しんでいたわけではなく、無理に明るく振舞っていたのだろうか。
「だって……だいちゃん、なんで、あたしなんかと」
大輔はぎゅっと拳を握った。
その先を言わせたくない。理屈に先立って、そう思っていた。
「ゆき」
弾かれたように雪乃が顔を上げる。
「それ以上、言いなや」
雪乃はつらそうに表情を歪め、俯いた。それでも尚、何かを伝えようと口を開く。感情が高ぶっているためか、ほとんど泣いているような声音だった。
「っ、ごめん……迷惑やって、分かってるのに、ごめん。……あたし、だいちゃんのこと――」
なにかに怯えているような、不安に押し潰されそうな。

不意にフラッシュバックに襲われる。
こんな瞳を、大輔は以前にも見たことがあった。

確か三年前の秋、雪乃が中学二年のときだ。その時期、雪乃は半月ほど学校を休んだ。朝、学校に行こうとすると足がすくんだり、玄関先で吐くようになってしまったからだった。
雪乃が話すことを拒んだため、はっきりとした理由はいまだ判然としない。
大輔はその間、何度も雪乃に会った。曖昧な記憶の糸をたぐり寄せると、心の奥底に沈んでいた情景が浮かび上がってくる。
――あたし、最低や。弱くて、いつも怖がってばっかりで……
ベッドの上に座り込み、雪乃は自分を責めつづけた。嗚咽を堪えようとする姿が痛々しかった。
どうにかして励まそうと、大輔は考えつく限りの言葉を総動員した。けれど、何を言っても空回りしているだけのように思え、もどかしさばかりが募った。
――ごめんな……せっかく来てくれたのに、ごめん。もう、あたしのこと、気にせんでええから。
小刻みに肩を震わせ、雪乃が心底申し訳なさそうに謝る。
それを聞き、大輔はどうしてか、憤りにも似た感情にとらわれた。無理な相談だと思った。そんなこと、できるわけがない。
けれど、その理由をどう言い表わせばよいか分からず、大輔は当たり障りのない言葉を返した。
――学校行けなくなったとか聞いて、ほっとけるわけないやろ。
雪乃は泣きじゃくりながら、ごめん、と謝った。迷惑かけてごめん、と何度も。

あのときと、同じ瞳だ。

「……ゆき、あのな」
声をかけて雪乃の言葉を制する。雪乃はびくりと肩を強張らせ、視線を彷徨わせた。それから、その先を聞きたくないとでも言うように、小さくかぶりを振る。
大輔は立ち上がって、雪乃のそばに歩み寄った。
「ちゃんと、こっち向いて」
雪乃が恐るおそるといった様子で顔を上げる。ようやく視線が合った。
あの日と同じ、雪乃の瞳が問いかけてくる。
――なんで、あたしなんかと、一緒にいてくれるん？
答えが、見つかった。
幼なじみとしての義務感だとか責任感だとか、そんな面倒なものではない。
今まで気づけなかったのが不思議なほど、単純な答え。
それを伝えようとして、大輔は顔が火照るのを感じた。乾いたのどに声が貼りつく。
大輔も、雪乃ほどではないが奥手なたちだ。相手が長年一緒にいた幼なじみであっても、恥ずかしいものは恥ずかしい。
けれど、大輔の方から伝えなければ、雪乃はこれからも変わらないだろう。自分の存在が大輔の負担になっているという引け目。いつか大輔に見放されるのではないかという不安。そういった、大輔にしてみれば不要なものに、がんじがらめにされて。
機会はもう、いましかない。焼けつくような焦りが大輔を後押しした。
「俺、ゆきのこと、好きやで」
やっと出た声は、かすれていた。
気の利いた前置きも、凝った言い回しも一切ない告白。
それが精一杯だった。

信じがたい話でも耳にしたかのように、雪乃が息を飲み、目を見開く。それから、ゆっくりと顔をうつむけた。
静寂が横たわる。植え込みの木々が、風にささやく。
胸のつかえが下りて、大輔は小さく息をついた。言葉にして初めて、自分の感情が理解できた気がした。内心に立ち込めていた霧が晴れた心地だった。
「……なんで」
雪乃が口元を押さえ、首を横に振る。
「あたし、だいちゃんに、気ぃ遣わせてばっかりで……疲れるやろ？　あたしと、おっても」
「そんなこと、ない」
雪乃の言葉を遮って、大輔はつづけた。
「ゆきの笑った顔も、優しいとこも……それに弱いとこも、全部好きやねん。だから、これから先も一緒にいたいって……あかん、かな」
ああ、やっぱり向いてへんな、こういうの。
内心で嘆息する。
スマートな告白とか、無理やわ。
大輔は情けない思いを振り払って、雪乃の様子を見守った。
なにかを堪えるように、じっと黙り込んでいる雪乃。そこにふと、過去の雪乃の姿が重なった。これまで思い返してみることもなかった些細な出来事が、色鮮やかによみがえってくる。
幼い頃から極度の人見知りで、同年代の子どもに対してさえ怯えるほどだったけれど、大輔にはあどけない笑顔を見せてくれたこと。
可愛がってくれた祖母を亡くして、ひとり駐車場で泣いていた大輔を見つけ出し、小さな手で頭を撫でてくれたこと。
大輔が友人と大喧嘩して落ち込んでいたとき、不器用に、そして一生懸命に励ましてくれたこと。
どれが直接の理由というわけではない。でもきっと、その一つひとつが理由なのだろう。

「あ……あたし、ずっと……迷惑やろし、諦めんとって」
雪乃がようやく言葉を紡ぎ出す。けれど、声は風に攫われてしまうほどか細く、聞き取りにくい。
聞こえへん、と口に出しかけたが、思いとどまった。代わりに雪乃のそばにしゃがみ込み、耳をそばだてる。
「けど、大学行ったら、楽しいこといっぱいあって……忘れちゃうんやろなって、思って、不安やってん」
雪乃が大きな目をまたたく。涙が一筋、頬を伝い落ちた。
「考え出すと、止まらなくなって……それで、いまのうちに伝えなって――でも、怖くて」
断片的な言葉が、頭の中で繋がっていく。雪乃らしいと思った。否定されるのを、拒絶されるのを恐れて、雪乃はこれまで、どれだけの思いを飲み込んできたのだろうか。
大輔は、いつもの調子で雪乃の名前を呼んだ。苦笑交じりに促す。
「そろそろ、はっきり結論聞きたいんやけどな」
吸い込まれそうなほどに澄んだ瞳で、雪乃が大輔を見つめる。それから、やっと合点がいったらしく、わずかにうなずいた。
「あたしも……だいちゃんのこと、好き」
刹那、ふっと身体の力が抜けて、大輔は深くため息を落とした。実際にそれを聞けたことで、張り詰めていた糸が切れたようだった。大仰なまでに声色に安堵をにじませる。
「あー、よかったぁ」
そして、不安げにこちらを窺っている雪乃に笑いかけ、言った。
「ありがとうな」
それを皮切りにしたように、雪乃はしゃくり上げて泣き始めた。懸命に声を押し殺し、感情を抑えようとする泣き方。小さい頃から変わらないと思った。
腕を伸ばし、幼い子どもをあやすように頭を撫でる。柔らかな黒髪が指の間を滑った。

「なんで泣くねん」
雪乃はあわてて手の甲で涙を拭い、ごめん、と小さく謝った。恥ずかしそうに大輔を見る。
「……嬉し泣きや」
揺れた、けれど笑いを含んだ声が、そう言った。
大輔は思わず視線を逸らす。
月明かりのせいだろうか。
見慣れたはずの雪乃の顔、涙に濡れた瞳が、今日はとてもきれいだった。

一年後の、月の夜

祭りが終わろうとしている商店街を抜けて、大輔は小さく息をついた。ときどき他愛のない会話を交わしながら、ほんの半年前まで自分が暮らしていたアパートにつづく夜道をたどる。その時間を慈しむように、ゆっくりと。

一戸建てやアパートが左右に立ち並ぶ、ひと気のない通り。前方に公園が見えてきたところで、左手に温かいものが触れた。やんわりとそれを握り返して横を振り向くと、雪乃が照れくさそうに俯いている。ひと目のない場所であれば、こうして自分から手を繋いでくれるようになったのは進歩だと思う。友人には、中学生かと馬鹿にされるけれど。

暗黙の了解があったかのように、どちらからともなく公園に足を踏み入れた。時間が時間なので、中には誰もいない。奥まったところにある木製のベンチに並んで腰を下ろす。乗り手のいないブランコが二台、視界に映り込んだ。

「だいちゃん、月」

雪乃が空を見上げて言う。

「きれいやね」

「なんか、既視感のある会話やな」

「うん」

嬉しくて仕方がないといったふうに、雪乃は頬を緩めた。

「覚えててくれてんね」

「ゆきが大泣きした日やろ。忘れるか」

からかって、大輔は空を仰ぐ。

すこし端の欠けた、輪郭のくっきりとした月が夜を照らしていた。

昔みたいにいられなくなるのが嫌だと、去年雪乃が言っていたことを思い出す。

あのときはピンと来なかったけれど、大学に入学してから、大輔はようやくその言葉の意味を悟った。大きく変化した、身の回りの環境。そこでの生活に埋没していく中で、十年以上も過ごしてきたこの町での日々が、わずかずつではあるが色彩を失っていくのを感じていた。

けれど、なにかが変わってしまったわけではないと大輔は思う。

風の匂いも月明かりも、隣にいる雪乃の笑顔も、一年前と同じだ。

「月におるうさぎは、淋しいんかな」

去年と同じ、答えのない雪乃の問いかけ。

「それは、うさぎに聞いてみんとわからへんな」

軽く受け流し、そして思い切ってたずねた。

「ゆきは淋しいん？」

雪乃はしばらくぼうっと空を見ていたが、やがて静かに口を開く。

「あのな……思ってんけど」

「うん」

「いま、数えきれんぐらいのひとが、月を見てるんやろね。きれいやなぁ、って」

はぐらかすような雪乃の言葉に、大輔はすこし拍子抜けした。

大輔の心中をよそに、雪乃がさらに言葉を継ぐ。ささやくような穏やかな声が、耳朶に染み入ってくる。

「うさぎからも、そういうひとたちが見えてて……だから、周りには誰もおらんのやけど、ほんまにひとりなわけやなくて。大丈夫なんかなって、思ってん」

「そうやな」

大輔はあいづちを打った。そうやな、と胸のうちで繰り返す。

月にいるうさぎがどんな気持ちなのかなど、自分たちに分かるはずがない。

どうせ分からないのだから、前向きな解釈をしているほうがいい。

去年のように、月にいるうさぎは淋しいのだと思っているより、

ずっといい。
「えっと、それでな、……あたしも」
繋いだままの手に力を込められた。細い指先から、雪乃の体温と鼓動が伝わってくる。
「ときどきでも、こうやって会えて嬉しいから、大丈夫」
黒目がちな瞳を大輔に向けて、雪乃ははにかんだ。
とくん、と心臓が高鳴るのを感じた。こんな表情、言葉は反則だと思った。衝動を抑えきれない。
ぐいと雪乃の身体を引き寄せる。驚いたように、ひゅっと息を飲む気配がした。月光をはじく黒髪と、強く抱きしめたら壊れてしまうのではないか、と錯覚するほど華奢な体躯。重なり合う二つの心音が聞こえてくる気さえする。
雪乃は声を発することも、身じろぎをすることもしなかった。強張っていた身体から、そろそろと力が抜けていく。
「だいちゃん」
ややあって、くぐもった声で雪乃が呼びかける。
「……来年も一緒に、月見ような」
ぽつりと呟かれたひと言。
大輔は自然と顔がほころぶのを感じた。雪乃の口からこんなふうに未来が語られるのは、初めてだった。
雪乃はいつだって、未来に目を向けるのを怖れていた。いまの関係がいつ壊れてしまうか知れない。そんな不安に脅かされていたのだろう。
――あたし、これから先も、だいちゃんの彼女でおってええんかな。
付き合った当初から、幾度となくそんな呟きを洩らした。ええに決まってるやろ、と大輔がその都度肯定しても、表情から憂いが消えることはなかった。
――もし、あたしのこと嫌いになったり、ええなって思うひとが他にできたりしたら言ってな。あたし、だいちゃんに好きって言っ

てもらえて、それだけですごい幸せやったから……だいちゃんのこと、縛りたくないねん。
臆病で、自分に自信が持てない。そんな雪乃の性格上、仕方のないことだと分かっていた。
けれどいつまで経っても、自分の気持ちを信用してもらえないようでもどかしくて、
――俺はゆきのことほんまに好きやし、他の誰にも興味ないって言ってるやろ。なんでそういうことばっかり言うねん。そんなに俺のこと信用できんか？
一度感情的な言葉をぶつけて以来、雪乃はぱたりと自分の不安を口にしなくなった。
どうしてあんなに刺のある言い方をしてしまったのだろうと、大輔はのちにそのときのことを悔やんだ。不安を口にしなくなったこと。それはただ、自分の感情に蓋をしてしまっただけだろうから。なにを言われようと、すべて杞憂だということ――自分はこれからも雪乃だけが好きだということを、伝えつづければよかったと。

「天気が悪くて、雲がかかってたりしたら見れへんけどな」
込み上げてくる感情を押し隠し、軽口を叩く。
「あ……そやね」
しゅんとした声が返ってきて、大輔はうろたえた。いちいち素直に受け止めすぎや、と内心で突っ込みを入れる。
「なんで暗くなるねん」
雪乃の頭をぽんぽんと撫でて、大輔は諭すように言った。
「そのときは、また別の日に見ればええだけの話やろ」
「うん」
今度はとても嬉しそうな声だった。きっといつものように、ふわふわとした笑みを浮かべているのだろう。その顔を見られないのは残念だけれど、いまは、腕の中にいる雪乃を手放したくない思いの方が大きかった。

大輔は濃紺の空に視線を移す。

そして、来年もそこにいるだろう、たくさんの人々を見守っている――たくさんの人々に見守られているたったひとりきりのうさぎを、心に焼きつけた。

一年後の、月の夜（後書き）

わざわざ祭りのあとの話を書いているあたりが、地味で自分らしいと思います。

賑やかな場所よりも、静かで落ち着いた場所のほうに惹かれるたちなので、それが作品にも反映されている感が。ちょっとは派手な話も書けたらいいんだけどなぁ。

そう言えば、月の影って国によってさまざまなとらえ方があるそうですね。

蟹だったり、ライオンだったり、女性だったり……人間の発想力ってすごい。

それでは、拙い話に最後までお付き合いくださり、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9020n/

月にはうさぎ、ひとりきり。

2011年10月31日03時25分発行